

新学術領域研究 (研究領域提案型)

# トランスカルチャー 状況下における 顔身体学の構築

—多文化をつなぐ顔と身体表現—

## Contents

領域代表挨拶

領域概要

計画研究

活動報告

次の予定

01

NEWSLETTER  
2017 DEC.



FACE & BODY

## 領域代表挨拶

顔と身体は常に個人の由来を露出し、かつ顕著に表現し、あるいは個人が何者であるかを読み解くことができる、隠すことのできない媒体です。グローバル化が叫ばれる現在、これまで無意識に行ってきた顔と身体にかかわる営みを意識化し、それぞれの文化で「当たり前」とされてきたことを再考していきたいと思います。

インターネットの普及で、世界に向けて気軽に意見を発信できるようになりましたが、その媒体は言語としても、感情をダイレクトに表すのは「顔文字」であったりします。また、世界に向けて自分自身を示すプロフィール写真で使われるのも、「顔」です。インターネットの普及により、現代社会に生きる人類は、これまでにない大量の顔と身体表現にさらされています。顔や身体という媒体において、われわれの社会はかつてないほどに膨大に広がったともいえるのです。メディアの進化に付随して、顔の越境化は進みます。一方で依然としてアンタッチャブルとされた異文化は、意識の外に存在したままの状況です。たとえば、自分と違う肌の色、自分とは違う身振りや手ぶりに忌避感を感じるのは、心理学の観点からいうとごく自然なことですが、グローバル化された世界の中で、こうしたヒトの持つ本性は依然隠れたままです。「身体的に知ること」を封印してきたことに対し、意識化して理解すべき段階にあるのではないのでしょうか。

この領域では、顔と身体を扱ったさまざまな研究を融合していきたいと思っています。古典的な文学作品に残された顔や身体表現から、その社会・文化的な背景を読み解くことができるでしょう。それぞれの人物の顔と身体をどのように表現してきたかにより、その文化が何を重要視し、何に注意を払っていたかを解析することができます。これまで個別に検討されてきた事象を統合することにより、新たな研究の視座を提供したいと考えます。

トランスカルチャーとは、混在した多様なカルチャーの「越境」の試みといえましょう。無意識を意識化することによる他者理解を、提供していきたいです。また越境する対象は社会・地域だけではなく、自身の性や身体そのものまでも含みます。身体表現は時代によって変わります。イスラム圏でのベールの使用の多様性は、設定された規範から逸脱していく歴史を語るものではないのでしょうか。このように個人と社会の関係を見つめ直すことにより、社会や個人の生き方を変える価値観を提供できたらと思います。本領域ではマクロとミクロの循環的な関係を基礎にした、人文社会の新たな学問領域を確立していく試みを続けていきます。

山口 真美  
(中央大学)



Masami K. Yamaguchi

## 領域概要

### 顔・身体学とは

本研究領域では、顔と身体表現の意識化されない点を意識化することにより、文化の中で閉じたコミュニケーションを理解し、異文化が相互に行き交うトランスカルチャー状況下における他者の受容を導く。顔や身体は目前に物理的に存在する対象であるため、多様な分野の共通の研究対象となりうる。現実の顔や身体表現とその認識様式を

実証的に検討し、文化的多様性とその背景要因を調査する。またそこからメカニズムの解明や社会組織上の再考が可能となり、顔と身体表現から時代や社会を考察することもできる。人文社会を中心としたアプローチで、トランスカルチャー状況下における顔身体学を考える。

### 研究組織

#### A01 顔と身体表現の異文化性検討

顔と身体表現の文化フィールドワーク研究  
床呂 郁哉 (東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所・教授)

顔と身体表現の多文化比較フィールドワーク実験研究  
高橋 康介 (中央大学心理学部・准教授)

#### B01 顔と身体表現の異文化を作り上げるメカニズムの解明

顔と身体表現の文化差の形成過程  
山口 真美 (中央大学文学部・教授)

顔と身体表現における潜在的・顕在的過程  
渡邊 克巳 (早稲田大学理工学術院・教授)

顔と身体表現における感覚間統合の文化間比較  
田中 章浩 (東京女子大学現代教養学部・教授)

#### C01 顔と身体表現の比較現象学

顔と身体表現の比較現象学  
河野 哲也 (立教大学文学部・教授)

現象の提供

メカニズムの解析

社会・文化の考察

#### 国際活動支援班

異文化比較の拠点・手法の共有

- 異文化比較研究手法  
ミシガン大学
- 眼球運動の解析  
フリブール大学(スイス)

### 班友

原島 博 (東京大学・名誉教授)

北山 晴一 (立教大学・名誉教授)

村田 純一 (立正大学・教授、東京大学・名誉教授)

柿木 隆介 (自然科学研究機構生理学研究所・教授)

領域ロゴ

製作：陣内利博教授(武蔵野美術大学)



FACE & BODY

# 「顔と身体表現の文化フィールドワーク研究」

## 研究代表者

### 床呂 郁哉

東京外国語大学  
アジア・アフリカ言語文化研究所・教授



## 研究分担者

- 西井 凉子 (東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所・教授)
- 吉田 ゆか子 (東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所・助教)
- 塩谷 もも (島根県立大学短期大学部・准教授)
- 田中 みわ子 (東日本国際大学健康福祉学部・准教授)

※なお研究の実施に当たっては東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 (AA研) の基幹研究人類学班ならびに、AA研の海外拠点の一つであるコタキナバル・リエゾンオフィス (KKLO) なども協力しながら、各種の研究活動やアウトリーチ活動等の企画を実施していくことを予定している。



## 研究の概要

現在、インターネットなど電子メディアの発達によって、文化や情報の地域や国境を越えた流動や混淆 (いわゆるトランスカルチャー的状况) が顕著となっている。この状況は、私たちの顔や身体をめぐる経験にも大きな影響を及ぼしている。例えば、私たちは今や電子メディア等を通じて、これまでの社会にみられることのない規模で、あらゆる／たくさんの顔 (や身体) のイメージにさらされるようになっていく。その結果として、顔 (や身体) に関する解釈や価値づけ、美意識等に関するグローバルな規模での標準化・画一化の圧力に晒されている。にもかかわらず、他方ではイスラーム圏にお

けるヴェールによる顔の隠蔽やバリ島における仮面芸能の持続などに代表されるように、ローカルな文化や個別の文脈ごとの顔や身体に関する独自の意味づけや実践なども逆に重要性を増しつつあるようにも見える。本研究では、以上のような状況認識を前提としながら、フィールドワークを含む文化人類学的手法を駆使することで、イスラーム圏やヒンドゥー文化圏等を含むアジア域内の異なる文化圏や地域の実生活現場における顔や身体的表現や実践をめぐる差異 (と共通性) に関して具体的に比較検討することを目的としている。

## 手法と対象

本研究班は、人類学的フィールドワークを含むフィールドサイエンスの研究手法を駆使し、顔と身体表現について、現場の文脈に即した調査研究を行う。顔や関係する身体表現に関して、イスラーム圏を含むアジア (東・東南アジア) 域内における異なる文化・社会的文脈に応じた比較研究を遂行する。狭義の顔はもちろん、顔を含む各種の身体的表現、衣服、装飾、仮面、ヴェール・スカーフ、あるいはフェイスブックをはじめとするインターネットを含むメディア上の顔や身体に関わる表象・表現などに関して調査研究を実施し、地域や文化ごとの差異と共通性を析出する。



スカーフを着用したムスリム (イスラーム教) の親子。フィリピン南部にて、床呂郁哉撮影



バリ島仮面舞踊劇トベンの大役。吉田ゆか子撮影



ベールを着用したムスリムの女性販売員。マニラにて、床呂郁哉撮影



バリ島仮面舞踊劇トベンの仮面。吉田ゆか子撮影

# 「顔と身体表現の多文化比較フィールド実験研究」

## 研究代表者

### 高橋 康介

中京大学心理学部・准教授



## 研究分担者

島田 将喜 (帝京科学大学生命環境学部・准教授)

## 連携研究者

大石 高典 (東京外国語大学現代アフリカ地域研究センター・講師)  
 銭 現 (九州大学持続可能な社会のための決断科学センター・助教)



## 研究の概要

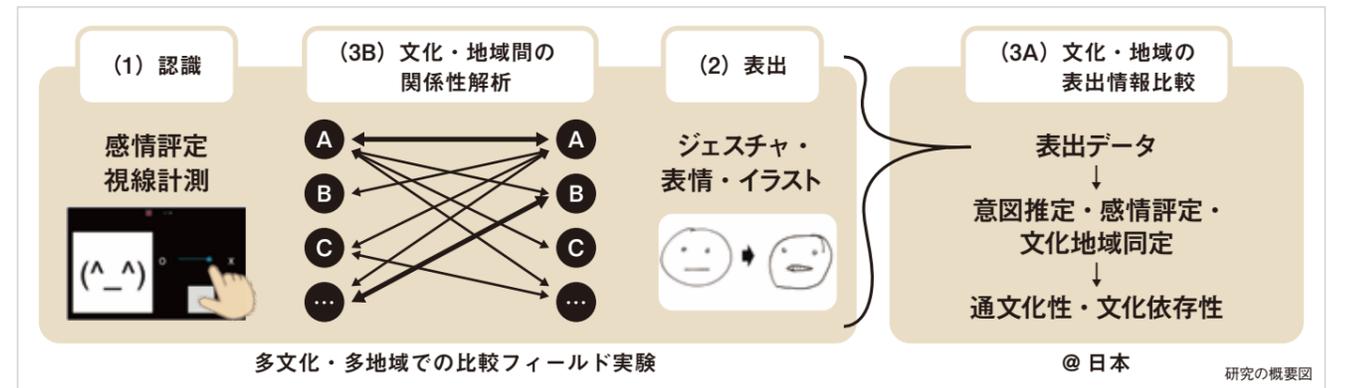
東洋 (東アジア) 対西洋 (北米・西欧) という対比により、文化心理学はその理論を高度に発展させてきた。しかし世界規模で文化・地域を見渡したとき、東洋と西洋の文化環境には共通点も多く、文化の多様性のごく限られた範囲のみを取り扱っているという限界もある。また現代では交通手段とICT環境の発展により、対面、オンライン問わず、東洋西洋圏を越えてグローバル規模の人的交流が急速に増えている。文化の多様性をグローバル規

模で理解して、そして現代のトランスカルチャー状況に貢献するために、東洋西洋圏を越えた多文化比較研究が必要である。

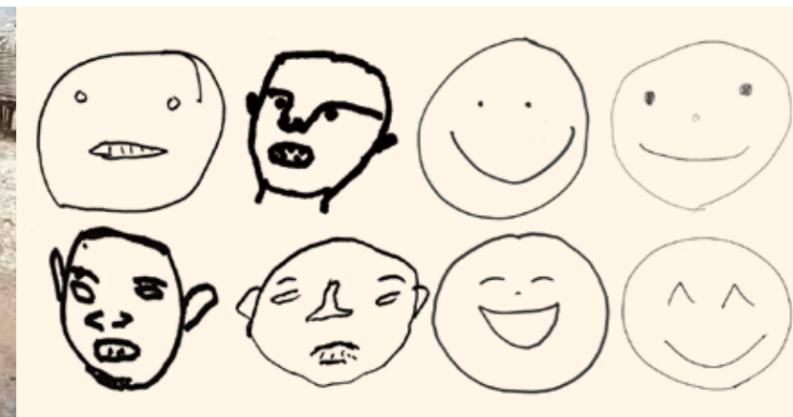
## 手法と対象

本計画班では、実験研究を専門とする心理学者とフィールドワークを専門とする霊長類学者、人類学者らのコラボレーションにより、フィールドの中に持ち運び可能な心理実験システムを構築する。顔や身体表現からどのように感情を認識

するのか、顔や身体表現によりどのように感情を表出するのか、という感情認識と表出の顔身体学を主な研究ドメインとして、東アジア・東南アジア、東西アフリカ、南米、西欧、北米など世界中のフィールドで再現・定量可能な実験を実施する。以上のフィールド実験を土台に、定量的検証と人類学的解釈を積み重ねて、コミュニケーションの中での顔と身体表現の役割・機能・利用形態の通文化性と文化依存性について解明する。



フィールド実験風景 (撮影・島田)



様々な地域で描いてもらった笑顔のイラスト (左からタンザニア、カメルーン、フィンランド、日本)

# 「顔と身体表現の文化差の形成過程」

## 研究代表者

山口 真美

中央大学文学部・教授



## 連携研究者

- 北山 忍 (ミシガン大学・教授)
- 金沢 創 (日本女子大学人間社会学部・教授)
- 永福 智志 (福島県立医科大学医学部・教授)
- 氏家 悠太 (中央大学研究開発機構・機構助教)
- 小林 恵 (愛知県心身障害者コロニー発達障害研究所・研究員)
- 山下 和香代 (鹿児島大学大学院理工学研究科・助教)
- Olivier Pascalis (グルノーブル・アルプ大学・教授)
- Alice J. O'Toole (テキサス大学ダラス校・教授)



## 研究の概要

多様な人々が集う現代社会において、顔と身体表現の文化的な相違や個々のバリエーションを知ることは、異文化理解の観点から重要である。特に意識の外に追いやられた文化的相違を知ること、異文化理解においては必須とされる。本研究では、こうした文化的差異や個人差の成り立ちを検討することを目的としている。特に、意識の外に追いやられた潜在的な過程の文化的差異を知るため、顔と身体表現の“顕在処理過程”

と“潜在処理過程”の発達から検討する。さらに、顔認知が成立する乳幼児を対象に、顔認知における潜在的学習と顕在的学習という2つの学習プロセスの結びつきと、その定型と非定型な発達についても検討する。

## 手法と対象

本研究では、スイスやフランス・カナダの研究者と共同で文化差の形成過程を検討し、かつ脳科学の研究者と連携しながら、顔身体表現の文化差

や個人差とその形成過程の神経基盤の解明を行う。手法としては、眼球運動計測と近赤外分光法 (fNIRS) を用いることにより、顔処理の顕在的処理・潜在的処理の学習メカニズムの解明を進める。乳幼児の顔学習時の顕在処理を选好反応で、潜在反応を眼球運動計測や SCR (皮膚電位反応) 計測を用いることにより、顔学習時の潜在処理と顕在処理メカニズムを解明する。さらに、臨床現場において定型児と非定型児の脳計測に近赤外分光法 (fNIRS) を適用する。

# 「顔と身体表現における潜在的・顕在的過程」

## 研究代表者

渡邊 克巳

早稲田大学理工学術院・教授



## 研究分担者

大塚 由美子 (愛媛大学法文学部・准教授)

## 連携研究者

- 松吉 大輔 (早稲田大学理工学術院・研究院講師)
- 北村 美穂 (早稲田大学高等研究所・准教授)
- 村田 藍子 (早稲田大学理工学術院・日本学術振興会特別研究員 PD)
- 田中 観自 (早稲田大学理工学術院・日本学術振興会特別研究員 PD)
- 佐々木 恭志郎 (早稲田大学理工学術院・日本学術振興会特別研究員 SPD)
- 中村 航洋 (早稲田大学理工学術院・日本学術振興会特別研究員 PD)
- Roberto Caldara (フリブール大学・教授)
- Colin Clifford (ニューサウスウェールズ大学・教授)



## 研究の概要

多様な人々が集い、異なる文化が交錯するトランスカルチャー状況にある現代社会において、顔と身体表現の差異と普遍性とを明らかにすることは、異文化理解とコミュニケーションの観点から特に重要である。これまで、人間は明示的には気付いていなくとも、微細な差を無意識に検出して行動を変容させることが、情動評価や意思決定を対象として示されてきたが、顔と身体表現という人間にとって真に重要な情報について、どのように無意識的な潜在処理がなされるかは明らかでない。本計画

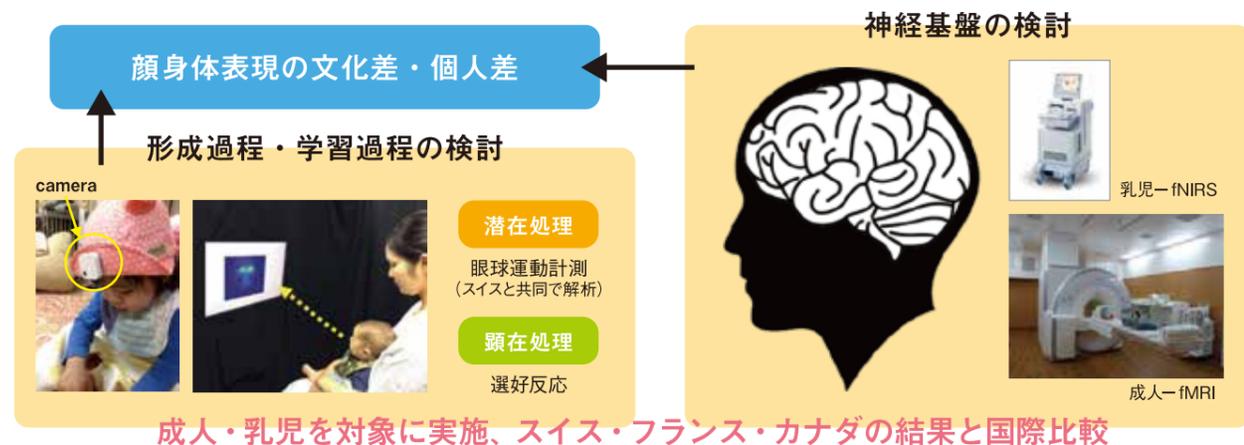
班では、顔と身体表現の文化差と個人差に注目して、顔認知の予測・記憶・選好に関する認知ストラテジーとダイナミクスを顕在過程・潜在過程の観点から実証的に解明する。

## 手法と対象

本研究では、心理学・認知科学・脳科学的手法に基づき、事前期待から始まり、知覚から記憶に至るまでの過程の解明の観点から「顔・身体学」の学術領域に寄与するため、海外の研究者と共同で、顔・身体表現の文化差や個人

差のプロセスやダイナミクスを“顕在処理過程”と“潜在処理過程”から明らかにする試みを行う。手法としては、他の研究班とも連携しながら、行動実験と眼球運動計測を中心に置き、皮膚電位 (SCR) や脳波 (EEG/ERP) も用いて研究を進める。顔や身体表現はその背景の社会文化を反映するものであり、このようなダイナミクスや時間依存性のデータを元に、顔や身体表現からそれぞれの文化や社会について理論化に資するための検討も行う。

## 顔と身体表現における文化差・個人差の形成過程・学習過程の検討 →顔と身体を通した社会的コミュニケーションの解明



# 「顔と身体表現における感覚間統合の文化間比較」

## 研究代表者

田中 章浩

東京女子大学現代教養学部・教授



## 連携研究者

高木 幸子 (常盤大学人間科学部・准教授)  
山本 寿子 (東京女子大学大学院・特任研究員)

## 研究協力者

河原 美彩子 (東京女子大学大学院・大学院生)  
澤田 佳子 (東京女子大学大学院・大学院生)  
Disa Sauter (アムステルダム大学・助教授)  
Mariska Kret (ライデン大学・助教授)



## 研究の概要

トランスカルチャー状況にある現代社会において、文化的背景の異なる他者と円滑なコミュニケーションを実現するためには、自身の感情の表出、そして他者の感情の知覚を媒介する顔と身体表現の普遍性と文化特異性を知ることが不可欠である。感情の知覚には顔や身体表現(視覚情報)のみならず、声(聴覚情報)も利用され、感覚間統合が本質的な役割を果たしている。本計画班では顔・身体・声の認識様式の文化的多様性の根源として、感覚間統合を含む「情報統合」に着目する。

そして、幼児期から成人にかけて感情知覚における複数情報統合の様式がどのように変化するかを比較文化的に検討し、得られた知見を統一的に説明する理論的枠組みの提唱をめざす。

## 手法と対象

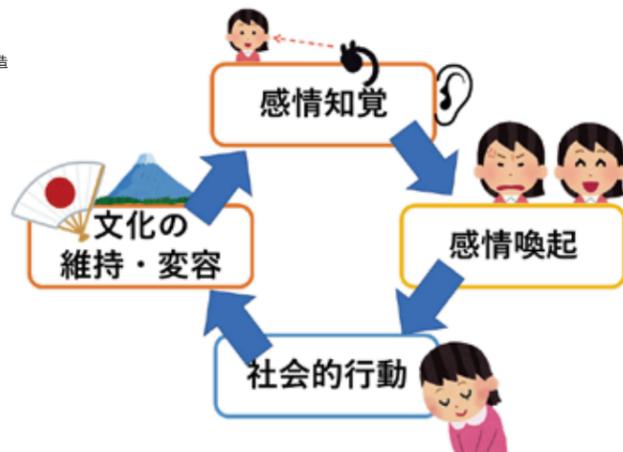
顔と声からの感情知覚を軸として、以下3点に関する検討を進める。実験では、感情の判断や評定などの行動指標を用いた顕在処理過程の検討と、視線計測や生理計測を用いた潜在処理過程の検討を併用する。(1) 複数情報統合の発達

過程の文化間比較を実施し、感情知覚はどのような認知機能と関連しながら発達し、文化差が生まれるのかを明らかにする。(2) 他者の感情を知覚した結果、自身の中にどのような感情が喚起され、どのような社会的行動につながるのかを比較文化的に検討する。(3) 海外から日本への移住者を対象とした実験を実施し、「文化獲得の臨界期」の有無を明らかにする。また、課題遂行時の脳活動を計測し、感覚間統合の異文化再適応過程を明らかにする。

感覚間統合の文化差：  
日本人は音声から、欧米では  
顔から感情を読み取る



文化と心の循環構造



実験風景

# 「顔と身体表現の比較現象学」

## 研究代表者

河野 哲也

立教大学文学部・教授



## 研究分担者

小手川 正二郎 (國學院大学文学部・准教授)



## 研究の概要

顔と身体は、個々人の生物学的・生理学的諸条件に規定された自然的存在であると同時に、学習と経験を通して文化・社会的制度によって馴化されていく社会的存在でもある。この意味で、顔と身体は、能動と受動、個人と社会、生得と学習、自然と社会がせめぎ合う場所である。本計画班では、フッサールにはじまる現象学的立場から、身体表現がどのように文化社会的制度を取り込んでいき、それがどのように個々人の間主観的關係を導くのか、身体主体がすでに自己身体に取り入れてもいる文化社会的制度をどのように意識して解釈し、どのように利用あるいは拒否し、どのように変容さ

せるかを分析する。これにより、本新学術領域研究全体における理論的な基礎を担当し、顔身体表現の一般理論の構築を目指すと同時に、異なる社会文化的制度における身体性の変異と変容に注目する「比較現象学」の確立を試みる。

## 手法と対象

本研究は、現象学と実証的研究を融合させる現象学的実証主義の立場に基づく。現象学は、個々人の経験があるがままに記述し、その意味関連の構造を分析解明する哲学的方法論である。本計画班では、各文化社会において、また各社会的場面と人間関係において、顔と身体

表現の可視性と可塑性、自己所有感がどのようにコード化され、どのように個々人がそのコードと向き合っているかについて現象学的記述を行い、それらを比較し、各文化社会における顔身体表現を相対視することで顔身体表現の比較現象学を共同作業として成立させていく。とくに以下の3つを、研究のテーマ・目標として掲げる。

- 「顔身体表現の比較現象学」国際研究会の立ち上げ
- 変化(へんげ)の現象学
- 身体の可視性・可塑性・所有感/非所有感の現象学



アトリウムとしての哲学対話の風景

## ★ 活動報告

2017年8月8日 火

### 第1回 総括班会議

東京大学駒場II・先端科学技術研究センターにて、新学術領域「顔・身体学」の第1回総括班会議を開催しました。各計画班の研究代表者と連携研究者が集まって、新たに始まる「顔・身体学」の方向性を議論するとともに、

に、学術調査官の先生からのアドバイスをいただきながら、活動の分担状況の確認や今後の活動予定についての話し合いを行いました。

2017年8月24日 木

### 国際理論心理学会におけるシンポジウム開催

立教大学池袋キャンパスで開催された国際理論心理学会にて、立教大学文学部・河野哲也教授（本領域計画班C01-P01研究代表者）が大会長を務めました。この大会では、中京大学心理学部・高橋康介准教授（計画班A01-P02研究代表者）、中央大学研究開発機構・氏家悠太機構助教（計画班B01-P01）、早稲田大学理工学術院・松吉大輔研究院講師（計画班B01-P02）がオーガナイザーを務め、シンポジウム「Psychology of the face: inter-individual, inter-cultural, and inter-disciplinary approach」が開催されました。当日は、氏家機構助教、松吉研究院講師、ならびに東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所・吉田ゆか子助教（計画班A01-P01）が研究発表を行い、日本女子大学人間社会学部・金沢創教授（計画班B01-P01）が指定討論者を務めました。

inter-individual, inter-cultural, and inter-disciplinary approach」が開催されました。当日は、氏家機構助教、松吉研究院講師、ならびに東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所・吉田ゆか子助教（計画班A01-P01）が研究発表を行い、日本女子大学人間社会学部・金沢創教授（計画班B01-P01）が指定討論者を務めました。



2017年9月10日 日

### 新学術領域研究「トランスカルチャー状況下における顔身体学の構築」 キックオフシンポジウム（関西）（顔学会主催「フォーラム顔学 2017」ジョイント企画）

関西学院大学西宮上ヶ原キャンパスにて、顔学会主催「フォーラム顔学 2017」ジョイント企画として、新学術領域「顔・身体学」のキックオフシンポジウムを開催しました。シンポジウムでは、新学術領域「顔・身体学」の各計

画班の紹介および公募研究についての説明を行いました。領域関係者のほか、50名近くの参加者にお越しいただき、参加者の方々からの「顔・身体学」に対する関心の高さをうかがい知る機会となりました。

2017年9月11日 月

### 第2回 総括班会議

東京女子大学にて、新学術領域「顔・身体学」の第2回総括班会議が開催されました。各計画班のメンバーが集まり、第1回総括班会議に引き続き、学術調査官の先生からのアドバイスをいただきながら、今後の活動の

スケジュールリング、各班の進捗状況の報告、12月に開催予定の領域会議および公開シンポジウムについての話し合いを行いました。

2017年9月11日 月

### 新学術領域研究「トランスカルチャー状況下における顔身体学の構築」 キックオフシンポジウム（関東）

東京女子大学にて、公募研究の説明会も兼ねた、新学術領域「顔・身体学」のキックオフシンポジウムを開催しました。関西と同様に、新学術領域「顔・身体学」の各計画班の紹介と、公募研究の説明を行いました。お越

しいいただいた40人近くの参加者の方々からも、「顔・身体学」の扱う領域や公募についての様々な質問をいただき、活発なシンポジウムとなりました。



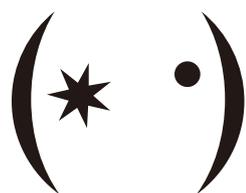
2017年11月2日 木

### 第1回 中央大学人文科学研究所主催公開講演会

中央大学駿河台記念館にて、第1回人文科学研究所主催公開講演会が開催されました。本領域の連携研究者でもある、グルノーブル・アルプ大学神経認知・心理学研究室のOlivier Pascalis 先生（計画班B01-P01）を講師としてお招きし、「On the Linkage between Face Processing, Language Processing, and Narrowing during Development」とのタイトルでご講演いただきました。フロアには、40人近くの参加者にお越しいただきました。講演のテーマは、乳児期に見られる「Perceptual narrowing」と呼ばれる発達的变化に関する内容でした。これは、顔の見え方や言語の聞こえ方が周囲の環境に合わせて大きく変化する社会的学習の1つです。Pascalis先生はまず、この発達的变化が、顔についても、言語についても見られるにもかかわらず、

それぞれが別々に検討されている、という問題点を指摘しました。そして、Pascalis先生ご自身の膨大な実験データに、多くの関連研究の紹介を交えながら、これらを統合的に捉える枠組みをご提案されていました。フロアからは多くの質問が飛び交い、その1つ1つに対してPascalis先生は丁寧に対応され、活発な議論が行われました。人間の持つ様々な文化とその交わりを対象に研究を進めていく「顔・身体学」にとって、乳児が自らの置かれた社会的環境に合わせて育つ様子を明らかにした知見は、大きな手がかりとなります。今回の講演会は、本領域メンバーの今後の研究にとって大きな意義を持つ機会となりました。





**新学術領域研究  
「顔・身体学」事務局**

E-mail : [contact@kao-shintai.jp](mailto:contact@kao-shintai.jp)  
WEB : <http://kao-shintai.jp>

---

次の予定

2017年12月1日 金

新学術領域「顔・身体学」  
第1回領域会議(東京外国語大学)

2017年12月2日 土

トランスカルチャー状況下における顔身体学の構築  
-第2回公開シンポジウム(東京外国語大学)

---